

《座談会》

これからの私立大学

—出席者— (ABC順)

西尾 昭 (大学法学部教授)

大下 尚一 (大学文学部教授)

酒井 康 (女子大学教授)

横山 卓雄 (大学工学部教授)

—司会—

緒方 純雄 (大学神学部教授)

私大をめぐる状況

緒方 昨日、総選挙の結果が出そろって政治的に興味深い状況のなかで、「これからの私立大学」というテーマで座談会を始めさせていただきます。

あとで先生方にお話しいただけると思いますが、とくに私立大学をめぐる客観的な状況は現在かなり激しい動きを見せております。

たとえば具体的な状況として、十八歳人口の増減ということがあります。それから国庫補助の削減という大学運営について重大な現実があります。また十月二十一日に、高等教育専門委員会が起草して、大学設置計画分科会から中間報告が出ております。これはたいへん興味のある内容をもっておりますし、大学としてどういうふうにこれを考えていいかという問題が出てきています。

これからの私立大学はどうあるべきかということについては、今まででもいいじゃないかという大胆な意見もあるでしょうし、やはり新しいヴィジョンを志向しなければいけないという考え方もあって、そのなかにいろん

な意見が左右に揺れ動いていて、これをまとめていくことはたいへんむづかしいと思います。そういったなかで、これからの私立大学ということについて自由にお話いただきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

私のほうからデータとして少し報告させていただきます。まず国庫補助の問題があります。昨年は国庫助成額は一昨年と同額でありました。ところが本年度は、昨年よりもマイナス二・三%の削減であり、来年度には、文部省の概算要求として、本年度よりマイナス一〇%の削減が出されております。金額にしますと二七七億ということになります。同志社大学については、昨年は約二三億六〇〇〇万、同志社女子大については約四億五〇〇〇万が補助されています。

それから二番目に十八歳人口の増減の問題があります。これはいろいろの統計でご承知だと思えます。本年、昭和五十八年の十八歳人口は約一七〇万であります。それが次第に増加しまして、昭和六十七年には約二〇五万になります。それから昭和七十五年にはこれとほとんど減少して約一五〇万になります。一三五万という人もいます。ですから約一五

年間に一七〇万からピークの二〇五万、それから一五〇万あるいは一三五万という急増急低落の状況が続きます。

それから、少し長くなりますので要点だけ申し上げますと、さきほど申し上げました高等教育専門委員会が起草して大学設置計画分科会で十月二十一日了承された中間報告があります。これは昭和六十一年から六十七年度にかけての計画であります。そのなかに基本的な考え方が提示されていますが、それをもう少し具体化して三つの視点があげられています。

一つは開かれた高等教育機関の視点、そのなかに具体的にいえるところあげられています、省かせていただきます。第二番目は高等教育の国際化の視点であります。第三番目は特色ある高等教育機関の視点であります。ここでは、日本の高等教育機関にはややもすると画一化する傾向がある。しかしそれはおかしいではないか、設置目的も、専門分野構成も、歴史的背景も、立地条件も、多種多様である。画一化すると、個性、特色を失って質的な停滞をもたらすことになる。これに加えて進学する学生は多種多様である。たとえば

高卒者、再入学、職業人、社会人、留学生等がある。だからそれに対応するには多様な要請に適切にこたえる必要がある。しかも個性的に対応する必要がある。こうしたことが大まかに言ってその計画の要点であります。

そして中間計画の該当年度になっている六十七年度から六十七年度までの定員増を四万二〇〇〇といちおう予定して、地域別に割り当てていますが、近畿では六〇〇〇名ということになっています。

そういう状況がありますのでご報告して、先生方からいろいろとお話をおうかがいたいと思います。

進学率・開かれた大学・学歴主義

横山 一七〇万と二〇五万というのは十八歳人口ではなくて、進学予定人口ですか。進学率がだいたい四十パーセント弱ですね。ですから進学率が現状より変わってきますと、この数字も変わるわけですね。

緒方 十八歳人口です。進学率も考えねばならぬ大きな問題ですが、進学率については先生方どういふふう判断なさっておられますか。酒井先生いかがですか。

酒井 一時三八%くらいまで上がってきて、その後若干大学離れの傾向が出てきたようですけれども、現在だいたい三五%くらいに落ちついているのじゃないでしょうか。三五%ぐらいの進学率が土台になって数字が出てくるように思いますが、いま横山先生おっしゃったように、進学率が今後どんなふうに変わっていくかということがありますね。だいたい横ばいでいくような感じがいたしますね。ただ女子の場合ですと、これはあまり減らないのじゃないか、むしろ少し伸びるのじゃないかなという感じがいたします。

緒方 この間たいへん興味のある論文を読みました。それは広島大学の大学教育研究センターの喜多村教授が「エコノミスト」誌で書かれたアメリカの大学についてのレポートです。

アメリカでは一九六〇年代各地に大学の興隆があった。この時代を私は知らないのですが、天下先生はよくご存じだと思います。たとえば一九六〇年には大学・短大の学生数が三六〇万、七〇年には八〇〇万。その原因として三つのBがある。Babies, Budget, Business、つまり大卒者への社会需要があっ

たということですね。ところが八〇年代には未曾有の危機を迎えている。さきほど言いましたベビー、バジェット、ビジネス、全部逆の方向に動いていった。ところが学生は比較的增加している。七〇年に八〇〇万、八〇年には一〇〇〇万。ところが、さきほど開かれた大学といいましたが、従来の伝統的なタイプの学生ではなくて非伝統的な学生、新しいタイプの学生が増加した。成人、女性、老人、それからマイノリティー・グループが増加した。それが短大に比較的多数をしめた。それとパート・タイムの学生が増加した。そうすると、一人に対する経費がフル・タイムの学生の何分の一という形で計算できないので予算が非常にふくれた。これらが同時に連動して「未曾有の危機」をうみだしている。結局八〇年代には二〇〇から三〇〇の大学がつぶれるのではないか。現に一九七〇年から七九年にかけての例ですが、新設一六校に対して二〇五校が閉鎖されたり、併合されたり、公立校に統合されています。

そういうように考えますと、日本はまだつぶれるということがないし、一見楽観的な状況ですが大丈夫でしょうか。ところでさきは

どの進学率の問題ですが、開かれた大学ということになった場合、従来のタイプの学生数がそのままなのか、職業人とか社会人とか、非伝統的なタイプの学生数がふえるかということなんですが、横山先生、どうでしょう。

横山 アメリカと日本の社会情勢はだいぶんちがうのじゃないかと思っています。日本の社会状況というのは、大学から出てきた人を大学卒として画一的に扱っていますね。たとえば一流私大なら一流私大、国立大学なら国立大学、短大なら短大というふうに考え、同志社大学と関西学院大学の学生とを区別して考えるという思考があまりございませんね。それは企業でも同じですね。企業は、一応ある程度の入学試験を合格しているという事実を偏差値的にしか考えなくて、同志社大学の学生ならば、こういう特徴があるから採るんだ、採ればどういふところへまわすんだというような細かい目的をもっていない。結局大学を出ているということだけで、私立大学なら私立大学という程度の大きな枠はありますけれども、特徴のある大学を出ているとか、特徴のある学科を出ているとかいうことが武器にならないで、大学を出ているという



酒井 康氏

ことだけが武器になっている。そうした思考が幅をきかせている間は進学率が減らない。未来のことですからわかりませんが、私はそう思っています。将来大学に非常に特徴が出てきて、同志社大学のたとえば法学部なら法学部はここに特徴があるのだということがはっきりしてきますと、社会の状況によって大学がいろいろ揺れ動くということになるのではないかと思います。これは大学の教育の質の内容とも関係があると思いますけれどね。

大下 私もだいたい同じような感じをもっています。アメリカの場合との相違に中途退学がある。アメリカでは、一年でやめ、二年でやめるという数がかかなり多くて、それでも大学に行かないよりは一、二年行った者は社会的上昇性が高いということがありますね。

日本でも、途中でやめる人もいるでしょうけれども、数は少ないし、一年だけ大学にいたからといって、それが社会的に活躍するのに実質としてプラスするということはないのじゃないか。このような違いがずい分あると思いますが、アメリカ的な状況が徐々に日本でも進むことは、長期的に見ていえるのじゃないかと思えます。ただ、再教育のためとか、あるいは女性や年齢の方が一定期間大学に来るとか、そこまで大学が開かれてくるかどうかは将来にかかっていると思うのです。いまの現状ではなかなかだろうと考えております。

緒方 現状では横山先生のおっしゃったとおり日本とアメリカとはちがっている。しかし長期に的に見ていけば、アメリカ的なパート・タイムの学生とか、あるいは従来の高校卒学生とちがったタイプの学生が入ってくるという状況があるだろう。どの程度の長期になるかということとは予測したいですが、理念的にいえば開かれた大学ということでそうした可能性はあるだろう、しかし日本の土壌を考えた場合、そこまでたどりつくのはなかなかでしょう。酒井先生いかがでしょう。

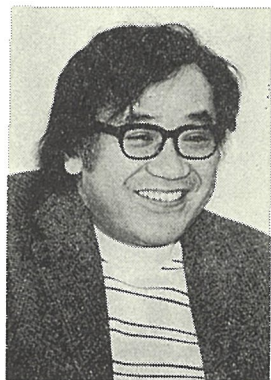
酒井 高等学校自体の教育には依然として

受験のための体制が強くなりますし、偏差値による進路指導が批判はされていますが、依然として狭い学力主義的な考え方がいまの教育のなかで一般化していると思えますね。そうすると、高等学校までの教育を受けたものが大学に向かって多様な志向性をもちうるかどうかというあたりがたいへん問題だと思っていますね。大学のほうでその受け皿をこしらえておいても、それに応じて進学してくる人間の需要の多様性というものが期待できるかどうか。やはり大学を含めて教育全般の問題として考えなければならぬんじゃないかと思えますね。

横山 何のために大学へ入るかということですね。

酒井 そうですね。ですから、画一化された教育のなかで、こういう偏差値による学歴主義的な進路の選択の仕方というのが、続くかぎり、大学のあり方も今の状態からあまり変わらないままに進んでいくのじゃないかなという感じがしますね。

緒方 たとえば、さきほど少しふれました開かれた高等教育機関の視点ということで作文されているなりに、二つの「開かれた」と



横山卓雄氏

いう意味が書かれています。それは各高等教育の機関が相互に開かれたものとなるべきだというのが一つの点です。それによって教育の質的な充実に資する。このためには放送とかVTRとかメディアを利用し、そこに放送大学が入ってくることになるのだろうと私は思います。

それからもう一つは、社会に開かれたという点について、先生方が今いわれたことと関係すると思います。一つは生涯教育の視点から述べていますね。もう一つは、地域に開かれたものとして地域の多様な要請にこたえるべきだということです。

どうでしょう、さきほど酒井先生もいわれました画一化、学歴主義的な傾向は、日本ではかなり長い間つづいていくでしょうし、そ

う顕著な形でこの傾向が変わっていくとは思いませんけれども、それはやはり努力しななければならぬことなんでしょうね。しかし大学だけが努力して受け皿になったって、だれもそんな大学に入っていけないという傾向にもなるのでしょうか。

横山 日本人は働きバチみたいによく働きますね。生活に余裕をもって楽しんでいく精神がないとふつういわれてますけれども、大学教育が将来の自分のビジネスに対して得になるようにという考え方であって、将来の自分の人生を豊かにするという形で大学に何かを求めてくるという人は、今の日本では少ないと思うんですね。今の学生は大学時代ものすごく遊ぶようにみえていても、就職すると必死になって働くという態勢がある程度まで残っているといえますか、われわれの時代はそれしかなかったですけれども、今でも残っている。それはなぜかよくわかりませんが、子ども、日本の社会にそういう風潮があるかぎり、地域に開かれた、あるいは開かれた高等教育といってもだめだと思うのです。また会社員のある部分が大学へかえてくるといふことはあっても、個人の多様な欲求からふ

たたび大学へかえてくるということは、十年スパンぐらいの期間では、あるかということ。もうちょっと時間がかかるんじゃないかと私は思いますけれどもね。

西尾 私はずっと法学部の教師しかしたことがないので、理工系あるいは医系の教育は知りません。あるいは女子大学の教育も知りませんから、あくまで法学部の教師としての経験からしかお話しできないのですけれども、日本の大学の果たしている役割と、アメリカにおける大学の地位というものはまだまだちがう。たとえば日本では、大学卒業生に対して事業あるいは官庁がむしろ再教育している。したがって、ダイレクトに大学の教育が社会のニーズとつながっていない面がある、というような点で、アメリカのあり方と日本におけるあり方がちがっている。極端な言い方をすれば、そういう企業あるいは官庁で再教育するためには、大学生がなまじっか個性をもっている差し支えるという、そういうことすらありうるのじゃないか。ということは、深く考えてみると、日本では変わっていることが悪であるという、そういう文化といえますか、哲学があるから、そうなっ



西尾 昭氏

いるのじゃないかと思う。もちろん社会の変化というものがあるわけで、日本の社会でも、今いろいろの先生方がおっしゃったように、ゆるやかな変化も感じられますけれども、短期に見た場合に変化というものはなかなかはっきりとあらわれてこないのじゃないか。

それからもう一つは、開かれた大学ということで社会人の再教育ということがいわれる。これが大切なことはわかりますけれども、はたして今日の大学の授業内容、あるいは教師の社会的経験、こういったものからそういうニーズにこたえることができるかどうかは疑問だと思います。すなわち大学がそういうものであるためには、大学の教師の経験、あるいは大学の教育の内容、そういった

ことについて大きな変化が迫られるのじゃないか、そんな気がいたします。たとえば私自身について言いますならば、私は法学部の教師以外のことは何もしたことがない。あるいは世の中のこともわからない。そういう私のごときものが社会の変化に対応する教育を社会人に対してしうるかどうか、という不安が残るわけですね。

大学教育とは

緒方 西尾先生はいま法学部とおっしゃいましたけれども、いろんな専門分野の先生方の率直なお考えを聞けば、おそらく同じようなことをおっしゃるのではないかと思います。いま進学率の問題から話を始めて、開かれた大学、個性ある大学、日本の風土の問題など出ました。ここで、いったい大学教育とは何かという、多少抽象的になるかも知れませんが、従来の大学教育、戦後の大学教育、今後の大学教育と、いま話は済んだみたいになっていますが、具体的にどういうふう

に酒井先生はお考えでしょうか。

酒井 大学の使命というものを考えてみますと、まず専門の学術について深く研究し教

授するという本来の使命が一つあると思いますが、すけれども、戦後の新制大学の目的のなかに、もう一ついわゆる人間の教育といひましようか、人間性を培うとか、あるいは本来に人間として物を考えていく力を養う、人間としてどう生きるか、そういう問題にも大学の教育がこたえていかなければいけない。それは専門教育に対して一般教育がそれを分担するような形で考えられますけれども、むしろそうでなくて、大学教育全体がそういった人間教育の課題にかかわっていく必要があるのじゃないか。もうひとつ考えれば、大学は、さきほどから出ていますように、社会に対してどういうふうに貢献していくか、職業社会、プロフェッショナルな領域に専門的な知識や技術を生かしていく、そういう人材養成をしていかなければならない。さきほど出ました、たとえば開かれた大学というものが社会の需要に対してどうこたえていくとか、地域の課題に対してどうこたえていくかという使命があると思います。ただそういった現実的な課題も大切ですが、私は大学は、ある意味では時流に超然として、学問の真理に対して高踏的というのでしょうか、純粹に自由な立場



天下尚一氏

でそれを追求していく使命を明確にしなければならぬのじゃないかと思っているんですけれどもね。

緒方 天下先生はアメリカの大学をよくご存知だと思います。いま酒井先生は三つの点をあげ、専門教育についておっしゃいましたけれども、深く探求していく専門教育、人間教育、社会教育といえますか、アメリカだったら力点はどこでしょうね。

大下 一般的にアメリカの大学は人間教育を重視しているとか、社会的実践にむすびついているとか、いろいろいわれますけれども、それはアメリカの大学自身が非常に多様であるという前提で考えないといけないでしょう。また一つの大学でも、その中でいろんな機能が果されている。ハーヴァードの場合

ならアンダー・グラデュエイト、いわゆる学部ですね。これは学生数がそれほど多くなくて、人間教育と、将来さらに深く真理を探究するための頭腦的な訓練をしている。そして深い真理の探究とか高い専門の教育は、大学院です。場合によっては大学院のほうが学部より学生の数が多いということがありますね。

それからいい大学であっても大学院をもたない大学、たとえば同志社と関係の深いアイモストのようなところですね。よく大学院のない大学はアメリカでも評価が低くなってきたと言われますが、一概にそう言い切れないと思います。カレッジに徹しながらリベラル・アーツの教育を守っていくのは困難ですが、いくつかの大学が協力しあっているんなら方策が考えられているようです。それからアメリカの大学が非常に多様だというのは、短期大学がよい例です。日本の短期大学とちょっとイメージがちがって、いわゆるコミュニティ・カレッジという名前が示すように、まさに地域の特長を生かしている。さまざまな地域の住民のニーズを反映する形でコミュニティ・カレッジが非常に多様な役割をし

ている。ですから、一概にこれがアメリカ型の大学だとはいえません。

そこで日本の大学を顧みると、専門教育と一般教育という問題が四年制のなかで十分に考えられていないし、大学院に至っては、本気でやっているかどうか。まじめにやっても、大学院の問題を本気でどこまで考えているかわからないわけですね。それからコミュニティ・カレッジ式のものはいまあまり見あたらないでしょう。大学間の協力がアメリカ型の一つの特徴だけれども、日本の場合には実質的でない。たとえば、同志社でも、大学と女子大の間には、先生の行き来はあっても、共通の講義はない。大学院でさえ何もなしでしよう。ですから大学をどうするかという問題は、できることからいろいろやってみながら、大学のあり方を考えていかなきゃいけないんじゃないかと思えますね。

専門教育と一般教育

緒方 酒井先生のおっしゃった三つの柱については、私もそうだと思います。

さて、大学教育の質を少し動的に考えて、実施ということを考えていくと、いま大下先



緒方純雄氏

生がいわれた機能的分担、あるいは協力という角度から考えることもできると思います。専門分野だけしか知らないという立場からすると、西尾先生に失礼ですけれども、これは結局わが道を行くということで、自分の専門分野を超えてはかの方々と本気で自分を傾けて協力して研究を進めていくということは、なかなかむづかしいと思います。たいへんデリケートな問題ですけれども、横山先生、専門教育と一般教育ということではどうでしょう。

横山 私は同志社で一般教育をやっていますが、育ったところは理学部でして、一般教育というものを主として受けてきた人間ではありません。もともと大学院まで行ってドクター・コースを出てボーイと同志社大学へほう

り込まれて、専門教育じゃなしに一般教育をやれといわれたという状況から私の同志社大学の生活が始まっています。何を教えたから一般教育かということは実はよくわからないのですが、最近の私なりの結論は、教える内容が一般的なのではなくて、受けている学生が将来その専門を志向しないということです、たとえば私は自分の専門の第四紀学とか地質学とかを講義した場合に、受けている学生のうちで、その分野へ行く者は一人もいないわけですね。したがって専門家を育てるということではない。教えている内容も、とくに私の専門と社会との関係をしゃべっているわけでもないわけです。もちろん聞いている人々は専門家ではありませんから、テクニカル・タームなんかは詳しく説明するとか、できるだけ身近な話をするとか、社会との関係は話すとかいうことに努めています、やはり自分の専門にやってきた学問を芯にしてしゃべるわけですね。ところが大学の理念からいいますと、一般教育は、さきほど酒井先生がおっしゃった人間教育だと考えねばならない。人間教育ということと考えますと、一人で毎年三千人からの学生に単位を与えてい

るわけですから、非常に悲しいことですが人間教育をやれといわれましても不可能なんです。人間教育はある種の人と人とのふれ合いのなかから出てくる。三千人に対しても人間教育はやれるといわれたら、どうにもなりませんけれども、条件が本来の一般教育としてのリベラル・アーツに対する教育条件とちがうわけなんです。

たとえば、この前アメリカのAKPの学生と話していて、同志社の学生と自分たちといちばんちがうところはという話題になったんですが、彼らは大学にすべての生活があるというのです。スポーツから、パーティーから、買物から、全部寮にいて全生活を大学のなかで過ごしている。ところが日本の学生の大学生活は二割くらいで、クラブ活動をやっている者でもせいぜい五割くらいです。そういう状況でリベラル・アーツ教育なんてことはできないのじゃないかという話が出たのです。ですから、一般教育の理念ということと現実と置かれているわれわれの条件とが非常にちがいますので、こういうところでお話をする、どうしたらいいかわからなくなってしまうという面が私はあると思うんです。一

人の教員が一年間に扱える学生の数というのは、そんなに多くはないですね。その辺が非常にむづかしくて、将来同志社大学がそういうことで解決されるという可能性もほとんどない。それこそさきほどの変化よりはるかに遅いのじゃないかと思いますので、困ってしまうのです。

酒井 その点は私も非常に感じるのですけれどね。私がアメリカにまいりましたときに、一般教育の実情を、そうたくさんじゃありませんが見ていて感じたのは、一般教育の授業形態が少人数のディシプリンを主とした形なんです。それがたいてい共通に見られる。

いわゆるベーシック・カレッジのなかでそういう訓練が行われるわけですね。日本の場合ですと、うちみたいな比較的小さい女子大でも、一般教育は二〇〇人くらいまでのクラスは当然あっていいんだという感じで、一般教育は専門の基礎であって、講義は概論をやるんだというような考え方ですね。そして教授形態として講義式でいいんだという考え方が牢固としてあるわけです。これをこわしていかないと、先生で指摘のような人間教育とか、あるいは思考の訓練とか、知性の啓蒙とかい

うようなことはできないですね。そういう点では、私は日本の戦後の新制大学の一般教育と専門教育のかかわりというのは、非常に不幸な歴史をつくり上げてしまったのじゃないかという気がして仕方がないのです。そして横山先生がおっしゃるように、たしかに日本の学生というのは通過していくという感じで、生活の場としての大学というものを感じていない。まして共同体的な教育的な関係をつくるというようなことは非常に困難だと思います。期待する方が無理だという感じがしてきますね。

〇ーハウ・ツウ・ライト

横山 それを改革しようというアイデアはたくさんあります。たとえば私がやっていることで学生がいちばん喜んでくれることは、文章の書き方という講義です。これを何百人を相手にしてやります。文章を書くときには、こういうふうに考えて書くんですよという講義を二、三回するんです。レポートを書かして、漢字をテンサクして返却して、きみらのレポートにはこういう特徴がある。まず第一にテーマがはっきりしない、どこから書き起こしたらいいか、というようなことを講

義するんですが、それがいちばん人気があるわけです。ある意味では文章の書き方というハウ・ツウものですね。ハウ・ツウ・ライトにはこれがないですね。ハウ・ツウ・ライト・ア・センテンスということがない。最近の学生は感覚的です。レポートでも、パツと書いて、話は変わるが、話は変わるがで、いろいろ書いたけれどもいうことになるわけです。同志社大学の一般教育専任者は一〇〇人以上いるのですから、その先生方が二〇人ずつぐらい受け持って、できるかどうかは別として、日本語の文章はこういうふうを書くんですよということをやれば、いいと思うのです。たとえば誤字なんかも直してあげるとか、きみはいつもこれをまちがえると、二〇人くらいだったらできますね。

西尾 そんなことをすると、大学教育の沽券にかかわるという(笑)。

横山 たとえばこんど自然科学の実験をやるうという話を出しましたですね。それでも最初にそんなことをして何の得になるかという話から始めなければいけませんね。やればやるだけ自分の首を絞めるというか、増担当も非常に少ない。

一方大学にいわしたらお金はありませんよと、こうなるわけです。冗費を削るというのは大切だけれども、同志社大学のなかで新しい教学プランを立てたからやりませんかといったときに、まずお金ありませんと言うのは、困ると思うんですよ。新しいプランは内容的にいいとか悪いとか、必要ないという意見は一つの見識ですね。ところが必要があるのなら、二〇〇万円くらいなんとかお金を工面するように考えてほしい。ですから、大学では、単にこういうことをやったらいいという理念だけではできない。大学は古い時代からの伝統のなかにスポツと入っていますから、それを少しでも揺するということは大変なことだと思いますね。

緒方 経費の問題、予算の問題が出てまいりましたが、先生の今いちばん大きいクラスは一〇〇〇人くらいいるのですか。

横山 今年のいちばん大きいクラスは七九七人です。

太下 横山さんがおっしゃったことにおもしろい点が二つあるのです。予算のことを入れると三つですけれども、一つは、専門に将来それをやらない者のために教えているのが一

般教育だという考え方です。こう見ますと、たとえば専門として私が西洋史を教えているといっても、西洋史で将来めしを食うという学生は非常に少ない。法律のようなかなり専門的なことを教えておられるところでも、法律で立っていく人は少ないでしょうね。そうしてみると、日本の大学は専門中心だといながらかなり一般教育的な性格をもっているんですね。ですから一つは、専門教育をやっているものが専門、専門と自己主張するのじゃなしに、その専門科目を教えながら実は一般教育的な意義を担っているんだ、というふうに考えることもできるのじゃないでしょうか。将来必要となる、専門教育と一般教育の見直しのなかでは、両方の共通面を見ているのかないといけないのではないのでしょうか。とくに同志社大学のように、一般と専門とが四年間にクサビ形のようになっている場合にはね。実は、ルースに四年間で自由によつたらよろしいということが現状だとは思いますがけれども、このままでは、専門教育と一般教育の問題はなかなか解決しない。

第二点は、横山さんのおっしゃった文章を書く練習。この点からアメリカを見てみます

と、授業の多くの部分が、どういうふうに物を書くかという訓練ですね。その段階が順次高くなってきまして、大学院に行けば学問的なものを書く訓練です。その場合に手先の技術じゃなしに、思考を表現するというのはどういふことかという訓練がいりますね。このような点から考えますと、さっき私が言いました一般教育と専門教育の関連、あるいは相互の協力ということが、もう少し具体的に出てくるのじゃないか、これはいつも感じていることです。

横山 人の文章を読んで、それで自分の文章をつくるという訓練も足らないんですね。そのまま写してしまふ。人の文章は、一べん

読んで、それを自分の経験なり勉強と比較して、どこら辺までが信用できて、どの辺が危ないかチェックをかけて、自分の文章にするわけですね。そういうものだよということをどこかで教えるということは、今の学生には非常に大切ですね。ですから、講義だけやっているとは非常に問題があります、たとえば同志社大学には一般教育のなかにそういう科目があるということを、特徴として売り出すと、同志社大学を出てきた人間は文章を書け

るんだという形で教育ができればいいと思うんですけどね。

大下 大学が社会のニーズに応えるとか、社会に貢献するためには、時代に遅れてはいけないと言われます。他方では、いつも変らぬ学問的な真理の追求ということを言うのですが、この点を具体的に考えて見る必要があります。「話は変わる」と、ポンポン問題を変えてやっていくのが新しいタイプの人間なのかもしないけれども、このような新しいタイプに合わす面だけじゃなしに、せめて今までの大学でやってきた一つの目的だけは、いくら古いといわれても教えるというかたくなさがあっていいじゃないですか。ものを書く訓練も、その重要な一つです。

横山 自分でちゃんと書ける能力があつてばらばらにしているのならいいんです。ばらばらにしか書けないということは、何も書けないということになってしましますね。

西尾 アメリカで一般教育・専門教育の相互関係が問題になるというようなことはあるのですか、われわれがいま論じているような悩みは……

大下 多少ニュアンスは違いますが、やは

りあると思いますね。ハーヴァードなどでやられたカリキュラムの変革ね、あれにも専門と一般教育の課題は含まれているでしょう。

横山 ハーバート大学でやっているコア・カリキュラムというのは、一般教育でライティングという科目は必修ですね。作文だと思ふんですけれども、結局そういうある種のハウ・トゥーものを真ん中に置いてやるう、今われわれが考えている一般教育でないものを考えていこうと意見が一〇年ほど前に出まして、二年ほど前に実験段階を終わってチェックがかかって、今ごろまた最終的に議論しているようですね。

西尾 私はアメリカのことは知りませんが、れども、わが国の教育においては、理念と現実というものがつねにうまくマッチしないので大きな悩みがある。というのは、たとえば一般教育と専門教育の問題でも、日本の大学はすべて旧制大学を基礎にして、突然アメリカの占領によってシステムが変わってしまったということ、また当然人的にもまだかなり旧制大学の教育を受けた方が教授になっていらっしゃる。私なども旧制大学の予科に入っ

て、それから新制大学を卒業したという中途半ばな人間なんですけれども、そういった日本大学の歴史的な性格、いわゆる旧制大学として発展してきた性格というものは、私どもに強く残っているということですね。したがってこういった問題も、また時間がたてばやがて変わっていくといえますか、いくらか解決していくのじゃないかと考えるわけですね。

それと同時に、これは問題がちょっと大きくなっていけないのですけれども、わが国で教育ということを出すと、すぐさま「学校」という言葉が連想される。しかもその学校もいわゆる学校教育法に基づく幼稚園から大学ということ、それ以外の学校というのは全然視野の外になってしまつて、教育を受けた者というのは、学校教育法による学歴を有するということになってしまふ。またそれは非常に大事なことで、進学率が高いということになりますけれども、それではなぜ学校教育を受けた者が大事なのかということについての社会の考え方と、それからその学校のなかで教育している教師の考え方が、果して一致しているのかどうかという感じがしますね。たとえば俗なことを申し上げて恐縮な

んですけれども、とくに男性の場合、なぜ大学を出なければいけないのかというと、女の子が結婚してくれないからということが大きな現実なんですね。その証拠に、女性の結婚希望の書類を見ると、必ず大学を出ている背の高い人ということが書いてある。大学を出ないと結婚できない。俗なことと思われまじけれども、これも一つの現実になっていると思うんですね。企業だってはたしてそれぞれの学問の能力を買っているかという、そうじゃなくて、大学卒業者という画一的なステータスによって人員計画を充足するというところで、その専門的な知識はあまり重視してないのじゃないか、こういう感じがするわけです。一方において理念を強調しても、それを受け入れる現実とのギャップがあまりにも大きいので、私も実際に大学のなかにおいて、もう、こういう教育をしていいかという迷いがあるような気がしてならないんですね。

○—外国語—

横山 大学のなかでできることとできないこととありますね。いろいろたくさん思うことがあるのですけれども、たとえば日本の大学はこれだけ英語をやっていて、英語で一般

教育のレポートを書かすということをしませんね。東南アジアへ行きますと、たとえばインドネシアの大学では、レポートの半分が英語なんですね。半部分が自国語、彼らは日本の学生よりも英語がずっとできる。日本の場合英語は入試を通るためと単位をとるためにあるのであって、書いたりしゃべったりするためにはないのですね。同志社大学は昔から英語を一生懸命やっていらっしゃる。せめて同志社大学では、たとえば一般教育のなかに各教科一つずつくらいに英語——英語だけでなくでも結構ですけれども、外国語の講義と、それでレポートを書くクラスをつくとか、ちょっととしたアイデアでやれないか。社会がそういうことを望まないのかということ、そうでもないと思います。望んでも大学そのものになかなか動かないという面があるような気がしなすね。

西尾 たとえば大学でなぜ外国語教育をするのか、私は不勉強ですが、そういうことなんかもっとはつきりさせて授業を受けさせる。

横山 要するにアンダー・グラデュエイトというのは何かということがはつきりしない

ので、大学のあいだに専門的教育というか、専門の研究がどの程度できるのかということに對しての見きわめをしないと、いまの問題はわからなくなってしまうと私は思っているんです。さきほど大下先生がおっしゃったように、いったい学生は教えられているもので本当に生きていくのか、生きていく人間とそうでない人間の率がどのくらいあるのか、こういうことをしっかりみつめて方針を立てないと、いま西尾先生がおっしゃったように、外国語をなぜ大学で教える必要があるのか、専修学校へ行つて習つてこいということではないのかといえますね。

大下 この座談会があるというので、私も何も勉強しなかったかわりに、二、三人の語学を教えておられる先生に、語学と一般教育の關係をうかがったんですね。同志社大では一般教育は四年間にわたつてとるのが望ましいというようなことを言っているが、語学は別だということでしょう。そして四回生まで語学を残しているのは、勉強しなかった証拠のように見られている。あるいは大学教育における英語の位置づけについて、どのような代表的意見や問題があるのかとうかが

ったのですけれどもはつきりしたご返事を聞けなかった。伝統的な読解力中心がプラクティカルな面を重視するのといった、普通の英語教育で問題となっている点、「渡辺・平泉論争」みたいにジャーナリズムにも登場した問題が大学のなかへ持ち込まれて、もう少し英語の会話のクラスもふやそうかというような議論はありますね。でも大学教育における語学教育の位置づけとなると、あいまいだということです。これは、語学教育の問題でなくて、ひいては大学教育とは何かということのあいまいさを端的にあらわしているのだと思います。

横山 上智大学が外国語の先生にネイティブを半分近く採用することで、上智の偏差値が上がったわけですね。あそこへ行ったらネイティブの先生から英語教育が受けられるという非常にプラクティカルでかつ単純なことで、上智大学は一流だといわれるようになった。それも一つの行き方だと思いますね。同志社は昔から英語と国際主義ということを中心にしていますから、その特徴をパッと出すというようにもう少し割り切ってもいいんじゃないかと思います。

ニーズへの対応は

西尾 同志社大学に限りますけれども、一般教育でも総合科目等々いろんな科目、あるいは専門の科目でも非常に選択の幅が広がって、これは非常にすぐれていると思うのですけれども、一般論として言う場合に、一つの大学でもこれだけ男女の学生がいる。価値の多様化の時代だと、学生のニーズもいろいろあると思うんですね。やはりそのニーズにこたえるようなヴァリエティを大学自身もつことも必要じゃないかというふうに感じていますね。あれだけマス・プロダクションでコストを下げて販路の拡大をはかってきた工業製品ですら、非常に細かなヴァリエーションを製品のなかにつくって新しいニーズにこたえているという状況ですから、まして人間を相手にする教育においては、そういう個々の人間にこたえる教育をするという努力をしていかなければならないのじゃないか、これは大学の問題だけじゃなくて、学校教育の制度全体に通することじゃないかと思うんですね。ご承知のとおり専修学校というものが社会の評判がよいようですけれども、これもや

はりニーズにこたえた教育をそれなりの立場でしているのじゃないかと思います。もちろん大学は専修学校じゃありませんから、おのずから立場はちがいますけれども、そういったことも考えていく必要があるのじゃないかと思います。

緒方 その点については、例えばこうした座談会で、「これからの私立大学」というテーマで私たちフリーに話し合う場を与えられましたが、大学のなかでそういう場がないんですね。つまり、各学部に属している先生方が集まってフリーに話をして、いま西尾先生がおっしゃった学生のもっているさまざまなニーズにこたえて、カリキュラムなどの多様化というような形で対応していくようなことを話し合う場がありませんね。最も知的な大学が、実施面にかけては最も知的でなく、ルーティンの運営だけにとどまっているところに問題がありはしないかと考えますね。したがって大学設置審議会などからいろんな案が出て、私たちはそれをあわててあと追いつているというような面がいつもありますね。例えば先ほどの中間報告について具体的なことは申し上げましたが、基本的なあり方とし

て、それぞれの教育機関、教育形態相互間に

機能的分担、連携、とくに教員、学生の流動が容易に行えるようなシステムをつくることが必要だと述べられていますね。やはり、大学のなかにそうしたちゃんとした場というのが設けられているのが当然ではないでしょうか。

ただ同志社の場合、長期計画云々という委員会がいままでいくつもありませんでしたが、答申案が出て、だいたい次の年度にはそれは済んだことに……（笑）。一度決めたら、もうそれで決まったということで過去のことにして流していくけれども、それをつないで、同志社大学の今後について話をしていくというような場がないことは、ちょっと悲しいですね。部長先生方も二十近くの委員会のメンバーであるし、暇な者はそんなことはあまり考えないし、意識をもっている方はいろいろ役職をもっていらっしやうて……。やはり、そういう場をぜひ大学のなかで設けていただきたいと思います。

大学の質ということについて、理念の問題、現実の問題、そして一般教育、専門教育についても話をしていただきましたが、まだ

まだありますね。

大学院

酒井 さっき大下先生からちょっと出たと思いますけれども、アメリカの大学の場合には、大学院の組織と教育というものが非常に発達してきたわけですね。いわゆるアンダーグラデュエイトの上にプロフェッショナルな教育、グラデュエイト・スクールというものが大規模につくり上げられている。ですから大学院そのものが予算をもち、組織としての独立性ももっている。日本の大学の場合は、大学院がきちんとした組織をもち、予算をもっているところは私学の場合、医学系を除くとまことに少い。戦後の教育のなかでは大学院教育は非常に立ち後れたという感じがします。半面さつき西尾先生がおっしゃったように依然として旧制の大学の考え方で、いまの四年制というものが見られていて、徹底した専門教育を考えると、いまの四年制大学では中途半端である。専門教育といっても結局基礎的なレベルでとまっているのじゃないか。専門教育をさらに充実し発展させていくためには、大学院レベルの教育をもっと拡大

していかなければならぬだろうと考えられます。いまの新制大学の制度はかたちの上では一般教育と専門教育をもちながら、旧制大学的な感覚でもって運営されていったところに出てきた矛盾と、それでいて大学院教育もなかなか発展せしめないような、なにか大学自体のもっている矛盾ですね。そういうものを、これからどういうふうに解決していったらいいのか、このままでいくと大学院は少数グループの、それ自体としては独立性をもつことのない状態のままで進んでいくということも考えられますが、そのへんはどうなんでしょうね。

緒方 大学院の問題あるいは大学院整備の問題は大学でも事あるごとに発言されてきておりますが、具体的には少しも進んでいない状況でしょうか、西尾先生。

西尾 大学院の問題はどの大学でも悩んでいるらっしゃるわけですね。いったい大学院とはどういうものか、何をするとおるかということですが、先ほどご発言もありましたように、非常に旧制的なイメージが強くて、名称も旧制大学の学部がそのまま今日の大学の学部ということになっている。旧制大学におけ

る大学院というのは、ひとつの制度でもなかった。そういうふうなことで、どうしても大学院という言葉が社会の人々の念頭にも薄い。高等教育を受ける者が増えてきたといえますけれども、ほとんどが大学どまりで、大学院へ行ってこそ最高の学校教育を受けたということがなるのですけれども、そういうことがない。そこに問題があると思う。

ひとつの例をとりますと、大学院へ進学しますと一般企業に就職できないということがある。こういう不思議なことが起こるわけでありますから、結局研究者の養成ということで、非常に狭い世界になっていく。大学院の学生を総称して「世捨て人」という人がありますが、そういう雰囲気になっている。不思議なものだと思いますね。

横山 私なんか行っていた大学院とは全然ちがいますね。私たち理学部の学生は大学院へ行くのがあたりまえ、六割か七割は大学院へ行くでしょう。京都大学の理学部は、大学院しかないみたいなのです。学部は学生なんかはっぱらかしですわ。とにかく勉強して単位を取ってきなさいと。学部はどうでもいい、大学院に来てからが問題だということ

ころで育つてますのでね。

緒方 いまでもそうですか。

横山 そうです。

西尾 理系と文系はその点ちがいますね。

大下 それでかなり企業とか社会に買われてますね。

横山 修士くらい出たほうが企業に入りやすいという条件がありますし、同志社の工学部でも最近は修士を出ないと一流企業へ入れない。これはものすごくちがいますね。

大下 欧米でもそういう問題はあって、オーバー・ドクター問題は、やはり社会科学、とくに人文科学系の場合に多い。大学院を出て学者になりたいという希望が多いけれども、大学に就職が非常にしにくくなった。ヨーロッパでも深刻だそうですね。

ところがアメリカの場合など、ロースクール出は会社へもどんどん入っていきますのですね。

横山 実学と虚学でちがってくるのですよね。

大下 緒方先生、いろんな資料をごらんになって、大学院問題の面白いレポートなんかありませんか。

緒方 あまり読んでいません。日本には少ないですね。

大下 高等教育に関する統計を見ると、日本はいろんな面で欧米並みになってきたけれども、大学院を入れてみると、ぐっと後れがめだっているんだそうですね。

緒方 最近おもしろいことは、大学という場合には大学、短大、専修学校があげられ、専修学校のなかには、かっこして専門課程と記されています。ですから専修学校が高等教育機関のなかに位置づけられて考えられている。だけど大学院というものは付加的に言及されておりすけれども、本論としては論議されていないようです。それからいろんな運動形態のなかにも、大学院云々ということはありませんね。

在外研究をなさった先生方は、一樣に感じになると思うのですが、例えば私、イギリスに行っておりますと、ほとんどの大学が一人学生数がありますと、二千人あるいは三千人が大学院の学生です。私がおりましたエディンバラ大学が約九千ですけれども、二千人が大学院の学生です。ただし、医学部とかがありますから、ちがうと思うのですが、

大学院が、先ほど酒井先生がおっしゃった専門研究教育を充実発展させる課程となつていると思います。

ただ、日本的な風土によって、文科系においては大学院を出た者は、教育研究者として身を立てる以外に就職はむづかしいでしょうね。企業による再教育で最もてこずるところでしょうか。

横山 ヨーロッパはいまだに、イギリスでも西ドイツでも大学進学率が二割ぐらいですね。ですから大学自身が日本のように膨大に拡大した場合と比べると非常にちがう。二割というと五人に一人ですから、エリート社会を構成できる。そのなかで三割とか、全体の一割ぐらいが大学院に行くということになってますね。そういう構造と、日本みたいに大学生が四割台までに達しそうな条件のなかで、ちよろつと大学院生がいる。ヨーロッパの同僚たちとしゃべっている場合は全然大学に対するイメージがちがいますね。アメリカは日本とよく似ていますね。

大下 よくアメリカの例が出ると、世界の大学はアメリカだけじゃないと言われますが、横山さんもおっしゃったように、日本は

アメリカ型のシステムになってしまっているんだから、当然アメリカとの対比が問題になりますね。ヨーロッパでも高等教育の大衆化が、徐々に趨勢となつていると聞いてますけれどもね。

緒方 学生の出身階層もだいぶんオープンになりましたね。言ってみれば、戦前の日本における旧制大学システムみたいなものが、ヨーロッパの大学では数からいっても規模からいってもあるように思いますね。

西尾 教育のシステムからいっても、大学へ行くのはかなり初級の段階からちがうコースで教育を受けてますからね。

緒方 だから、大学院の問題は非常に難しいな問題です。けれども、日本的風土、社会構造、物の考え方といったものが大学を型にはめていき、大学のなかからそれに対する多少のレジスタンスを試みている。しかし、そのなかで人口が減っていく、国庫助成が減っていく。先ほどの喜多村さんのお話では、八〇年代にはアメリカでは二百から三百の大学がつぶれるだろう。あすは日本の大学だ。新しい顧客層を奪われて、大学は惨めな低落状態をたどつていっているというのがアメリカ

だから、それが日本に起こってくるのではないかという危機感をこの論文で、しかも「エコノミスト」で書いていますから、たいへんおもしろいと思います。

大下 大学院についてですが、さっきも一般教育の問題とか、多人数クラスの問題が出たんですが、アメリカでは、大学院の学生をほとんどティーチング・アシスタントに使っているわけですね。大きな数のクラスでは先生一名にアシスタントが五、六人もいる。学生のディスカッションの指導をさせたり、レポートを見させたり、テストの採点もする。そして教授は、このような仕事を通して大学院生を訓練しているんですね。ティーチング・アシスタントになれば、その一年間の大学院をどうにか続けられるくらい奨学金が出る。

日本の場合も、大学院の学生を、大学教育にもつと活用できないでしょうか。同志社にも授業補助者、チューター制度がありますがアルバイトのようだったり、奨学金のたしみたいですね。もう少し大学の教育・研究全体のなかでプラスになる仕組みを考える努力ができませんかね。さっきの文章の書き方の教育な

ども考えて。

緒方 あれはたいへん中途半端ですね。女子大のほうでは、そういうことはないでしようか。

酒井 いまのところはございませんね。

同志社大学の特徴は何か

緒方 いろいろ問題についてお話しいただきましたが、国公立の大学に対して、これらの私立大学はいったいどういう特色をもつだろうか。個性ある教育ということもあるでしょう。あるいは同志社大学という私学の存在の意味もそこにかかっていると思うのですが、国公立の大学に対して私学はいろんな足かせがありますけれども、どういう進路があるでしようか。あるいはどういう進路を切り開いていくことができるでしようか。

この前、ある会合で、毎日新聞の原田という論説委員の方に話をしてもらいました。この方は、「教育を追う」というシリーズなどの教育問題取材班のキャップもしていられるのですが、国公立大学が私立大学に近づいてほしいし、それからこんどは私立大学が国公立に近づいてほしいと示唆的なことを、

発言されました。新聞記者ですからざっくりらんにお話しになったわけですね。国公立大学が私学に近づいてほしいということは、それは大学の自治という点で近づいてほしい。例えば人事、経営、財政が独自なものであってほしい。文部省立でなくて、大学の自治をもった大学になってほしいということが、そのポイントでありました。

私立大学が国公立に近づいてほしいということは、国士館大学、九州産業大学など、いろんな私立大学で問題が起こったように、私有性が強い。それから創立者——といっても現在の創立者の学校になりすぎている。それから学費を国公立並みに下げてほしいなど、といったことでありました。少しきめが粗いのですけれども、なにかご意見をおうかがいしたいと思います。

横山 私は総合科目の、一般教育の理念という科目を担当しています。最初の授業で学生に、「同志社大学の特徴は何だと思えますか」と、毎年聞いているのです。まったく回答が出てきませんね。その理由の一つは、考えたことがない。われわれの時代ですと、国立大学生と私立大学生と比べたら、お金をも

っているところがちがうとか、いろいろありました。最近ほとんど同じですから、「どこがちがうんだ」と問われたとたんに何も答えられないという状況があるわけです。しかし「ほかの大学とカリキュラムを比べてみなさい」という問題では、具体的に二つの大学のカリキュラムを並べて読んでみると、ずいぶんちがうのです。

要するに同志社大学の特徴は何だと聞かれて、同志社大学生が答えられないという状況は非常に悲しいことなんで、同志社大学の目玉商品は何かということをご自分で考えないといけないと思います。国立大学はひとつの基準に従って科目に並べればいい。私立大学でも基準はもろろん必要ですが、プラス突出したところをつくらないといけない。そういうものとしていったい同志社には何があるかということと、将来とも検討してほしいというふうに思いますね。

同志社大学には新島精神があるといわれている。それなら新島精神とは何だといわれたときに、「さあ」ということでは困るのです。例えばICUは、学生数が少なくて教師がたくさんいるというようなことでもいい。上智

は外国語をしつかりやっていると、何かあるわけですね。早稲田、慶応、同志社は何だといったら伝統があるということぐらいが特徴ですけども、いまの目玉商品は何かということ、やはり私立大学は個性をつくるということが必要なんじゃないですかね。

緒方 それは入学時に聞かれるのですか。

横山 いえ、三年生くらいですね。

緒方 三年生でそれはちょっと悲しいね。

大下 学生だけじゃないに、教えているわれわれに聞かれても非常に困る。

横山 いろんな大学と比べますと、同志社大学はものすごい特徴のある大学だとぼくは思っているんです。ところが同志社大学のかにいたら、それが当然だと思うところがあります。これは非常に俗なことですけど、学内でお酒を飲んでいけないということがありますね。あんなことが大学で守られているというのは、ぼくには不思議ですね。ふつうなら、あつという間につぶれそうなんです。そういうことが守られるという異常な社会ですよ。学生の気質でも、いろんな意味で同志社というのはあるのですけれども、それが明白になってない。それを明白にして、

目玉商品としてこれが同志社の特徴ですよといえないといけない。もちろん、もう少しちゃんとしたことでないといけないと思いますけれどね。

緒方 私は同志社に入って二つの私立大学を経験しています。もちろん戦前のことになりますが、ある私立のキリスト教主義の学校から来たときに、同志社大学というのは野人だなという感じがしましたね。戦争中でしかれど、フリーであつて、個性があつて、先生方もなかなか変わり者がいて、いまだにその先生の個性を視覚化することもできるし、ジェスチャーで示すこともできるぐらいです。横山先生はいまの特徴をおっしゃって、期せずして同志社大学の個性みたいな話になってきました。どうでしょうねえ、これはいつも課題ですね。

一月十六日の教職員の懇談会で、酒井先生に「一貫教育をめぐって」というお話をしていたわけですが、名目的にはあるわけですね。キリスト教主義教育だ、人間形成だと。幼稚園から、中学、高校、大学と、それが一貫教育だと。しかし、これは非常に名目化されていて、ほんとにそうなのかといつも

考えるのですけれど、核心に触れるところでスツと、まあこれはこの程度で、ということになってしましますね。

酒井 横山先生がおっしゃった、いわく言い難い同志社のなよさということですが、教育機関としてははっきりしたカリキュラムのうえでの独自性とか、教育の仕方における特色とか、そういうものが始終課題として検討されていかなければならないだろうと思いますが、なかなか目に見えるものとして打ち出すということのむづかしさがありますね。

数年前の卒業生で、家政学部を出て家族社会学を勉強するというので、国立のある女子大学の大学院へ行ってマスターを取って、いまそこに残って研究補佐員のような仕事をしているわけですが、最近会って話を聞いていると、同志社のなかにはなんととも言えない人間的な温かさがある。それがちがうところへ行つて初めてわかってきた。同志社での学生生活を振り返ってみて、なにか非常に人間的な安らぎみたいなものを感じる。そういう学校の気風を評価しているわけですね。

なにかそれこそいわく言い難いような同志社のもっている気風でしようか、雰囲気とい

うのでしょうか。そういうものは一朝一夕に
つくられたものじゃないだろうと思います。
しかしそれは、同志社がつくり上げてきた精
神的なひとつの土壌みたいなものじゃないか
という気がしますね。

横山 この座談会の最初にちょっとおとし
やったことがありますね。それが同志社のな
んです。ふつうの大学だったらごんごん悪口
を言ってもいいわけです。責任さえとれた
ら。ところが同志社大学は、なんとなくそう
いう批判をマイルドにする。ただ、そうい
内なるよさというものは、外に対しては威力
を発揮しませんね。なんとなく、ばやししち
やうんです。

緒方 そうですね。

西尾 例えば、高校生なり予備校生が大学
を選択する基準として、そういうものが意味
をもっているかどうか。もってほしいのです
けれども、どうなんでしょうか。

横山 同志社は国際性があるという。国際
性とは何だというと、国際高校があるとい
うのが最近ありますが、何だといわれたら非
常に困るのですね。それならそれで追求し
て、十年なら十年の間に明白にそういうこと

がいえるようなものをつくらうじゃないか、
というようなことが言えないのが同志社です
ね。なんとなく、そういうことができない。
だから困りますね。

大下 いまおっしゃった批判もないわけじ
ゃないが、そうかといって、当局が何かがリ
ーダーシップをとって新しいものをやってい
くという、よその私学にあるような仕方
でも、だめですね。

緒方 そういうことをしたら、必ず足を引
つ張られる。それを一方的に強行していく
と、現在のようない貫教育の会合があつて
も、外に対して、それがきちつとしたひとつ
の姿勢みたいな形で出ていかなければ。国際教育
ということにしたら、非常に弱いですね。
数の問題を言っではいけないのですけど、
留学生は何人ぐらいいるのでしょう。

横山 北京大学へ行きましたら、四百人ぐ
らい全寮制の留学生をもってますね。もちろ
んあそこは国立大学ですからお金は関係あり
ませんけれども。私は松山先生にも木枝学長
にも言ったことがあるのですが、シンガポー
ルとかニューヨークに国際高校をつくったら
どうですか、そこにある程度無条件で同志

社大学へ外国人の学生を受け入れたら、ずい
ぶんちがうんじゃないですか。文部省に言
ったら喜ぶにきまつているアイデアでもあ
りますしね。何か一つ、外に対して、いま同
志社はこういうことをやっております、同志
社へ来たら外国人の学生がたくさんいて、そ
ういう人たちとパーティーをやったり、コン
パをやったりすることができるといふよう
な具体的特徴なしに私立大学は今後生き残
れないようなことになるのではないかと。

緒方 明確化しても、それを実現していく
根気がない。根気ということとはまた、集中し
たひとつの精神だと思ふのですけれども、そ
ういったものがないですね。いつでもトピッ
クの程度にはなるけれども、それをじゃやっ
ていこうというところまで結晶していきな
い。

横山 法政が言語文化学科というのをつく
るといって、結局つぶれましたね。私は法政
へ行つて聞いたときにつくづく思ったのです
が、理事の一人がずっと学部作りを担当して
いる。いわゆる職員理事が、二人の職員の専
任者を使つて三人でがんばつておられた。何
かを仕上げようと思つたら、ローテーション



で決まる教員の主任とか学部長とかではなかなかできないらしいですね。準備室みたいなものをつくって少なくとも五年とか十年それに専任する人を置かなくちゃいけない。同志社大学はそういう精神がありませんね。例えば、横山なら横山はさしあたって授業しなくてもいい、十年間それをやりなさいというやり方もある。そういうこともしない。ワアツと言っというは、つぶしてしまふ。根気だけじゃなくて、それこそどうやって新しいものをつくるかというシステムができてないと思いますね。

大下 国立と私学の問題ですけれども、私学の場合によく考えないといけないのは、国立もこれから非常に多様化して特徴が出てくると思われることです。国立の場合は私学のように自由に動けないように見えても、結局文部省があつて、予算をやるから新しいものをつくれということになると案外、私学よりも思ひきつたことが早くできる。ところが私学の場合、政策決定という大げさだけど、いま横山さんがおっしゃったその面が問題なんです。私学は気がついた時には、ずっとおくらせてしまふということもある。私学とい

うより、同志社がと言つた方がいいかもしれません。とにかく今のままで、新しいものをつくれといったって無理なんじゃないでしようかね。

西尾 いわゆる企業という事業部制ですね。そういうシステムを導入しないと、とくに同志社は規模もかなり大規模だし、もちろんみなで共通の問題を考えていくという姿勢はいいのですけれども、意思決定の迅速性というのを考えると、少し規模が大きいんじゃないかという感じがする。

大下 もっと学部独立制を認めていくのも一案だと思いますが、ある学部でなにかをやりかけて、成功すると、あそこもやった、こっちもやろうということになるけれども、どこかでボシヤると、あそこがやつてだめだったんだから、うちもだめだと。だめの方が多いですよ。

横山 なぜだめになったかということを確認化しないのですね。お金がないのか、理念がだめだったのか、社会とうまく合わないのか。だめになったらだめになった理由があれば、それをこえて、それじゃこうしようといつて次のものが出るのですけれども、なん

となくだめになるんですね。いい面と悪い面とがありますけれども、今後の同志社大学ということを考えるには、そのへん非常に重要なことだと思いますね。

大下 そうしてみると、一般教育の総合科目ひとつとっても、よくできたといえよくできた。

横山 一つのものをつくるということは大変です。ただ、どなたかが反対しているという場合は、だいたい誤解が理由なんです。そのときに、自分がそれに専心する体制になっていれば、反対している人のところへ行行って、どういうご意見でしょうかということやダイレクトに聞けばいいわけですね。同志社のシステムは主任制度でしょう。真面目に長期計画にたずさわったら食べていけない。授業もやっているし、教授会も出ているし、ほんとうに大変なんですね。学長なら学長のところとブレインをつくって、授業も全部やめにして、というようなことを考えたらいいと思うのですけれどね。

緒方 それは非常にだいいですね。例えば昨年、八つの部門改善委員会があって、半年ぐらいで答申案を出しましたが、長くて一年

ぐらいのなかで委員会をつくって計画案を出して、一年間終わるとそれでいちおうピリオドを打つ。次はまた別の段階になる。その流れがないのですね。

夜間の二部の答申も出ておりましたけれども、あれも結局、いまはどこか棚に入っておつて、だれもいじくらない。なにか関連事項があると、こういう資料がありますといつて持つてこられる。

同志社全体としての意思決定をしていくしくみ、それから、それにかかる熱意といったものがないと大きなことはできませんね。長期にわたる見通しを立てるといふようなことは、むづかしいのではないでしょう。しかも、それを実行に移していくことを含めた計画を立てていくことは、非常にむづかしいと思います。

横山 なぜ田辺校地を利用するのですかという問いに答えられなくなつてしまふのです。昔、決まりましたからとか、中心校地問題とか、それはほんとうは付随の問題ですね。大学として田辺校地を利用するというのは、なにかもつと、せめてうそでもいいから……。

緒方 いろんなテーマにわたつて話が出ましたけれども……。

横山 いちばん最初の話は、全体としては人数が増えるとか減ってくるということは、日本の文化からいえばそう心配はないという意見になったわけですね。

寄付金

緒方 進学率は固定するだろうと。ただし、従来私立大学は国庫助成を求めて、それにのつとつて定員を増加してもらつたから、これ幸いとはかり飛びついておつただけけれども、もう十五年ぐらいして百五十万あるいは百三十五万ぐらいに減つちゃうと、いったいその間に手当していた人件、施設、経費といったものがどうなるのか。状況がちがいますね、そのところでは。

横山 私立大学としては、ある意味で収入を授業料だけに頼つていふということが、将来とも大丈夫かという問題がある。もし授業料だけに頼らないのであれば、いったい何に頼るかという、社会の冗費というか、余りの富に頼る以外にない。寄付をしてもらうための理由が要りますね。同志社大学は日本の

ために、社会のためにこういうことをやりますからお金を出してください。これは一種の私立大学の特徴みたいなものになると思うのですが、そこまでいかないと、百年ということでは解決しないのじゃないでしょうかね。

緒方　そうですね。ですから一つは大学における教育の質の問題、しかしそれは伝統的なことにとどまるのではなくて新しいもの、突出したものをつくっていくような創意と質の問題が大学の教育に求められてくるのではないのでしょうか。

横山　政治家は後援会を作っているのも投票をしてもらっているように、同志社大学の質の問題あるいは方向の問題も含めて、例えば関西なら関西に同志社大学の後援会みたいなものをつくって、そこから一定の寄付が定期的に入るといふことを本来は考えておかないと、私立大学は存立できない。幸か不幸か、一九六〇年から大学生の数がほぼ三倍になっているわけですね。そういう高度成長のなかでほとんどの問題はカバーされてしまっているのですけれども、二十一世紀ということになったら、政治家が投票マシーンをつ

くるみたいなつもりで、大学でもそういった機構をもたないと、少なくとも特徴のあることをしようと思ったら、お金がかかりますからね。

緒方　大下先生、アメリカの大学で、学費だけで賄っている大学はどこもないでしょうね。

大下　アメリカの私学は、基金もあるし募金もする。ずいぶん前から財産を持っていて、それを上手に活用しています。でも学費も高額になりました。それに間接に国の資金も入っていました、これが削られてきたのが痛手ですね。日本の場合ですけれど、国庫助成は、自民党の政策がどうか、文部省の方針がどうかと言いますけれど、どんどん増えていくものじゃないことは明らかです。あらゆる面で国家の援助を見直していこうというのは、日本だけのことじゃない。そうすると援助のほうも、ある程度個性を生かした援助になるでしょうね。私学の自己努力があつての国の援助だという考えですね。これには反対の意見も多いでしょうが。

横山　税金と同じです。われわれの出した税金がどこに使われているかわからないと、

あまりファイトが出ませんね。それを指定寄付みたいなもので、同志社大学のこれをするために、毎年いくらかずつ寄付してくださいというようなやり方ができれば……。もちろんそれに専任する人間が要りますけれど、いますぐということではなくて、二十年、三十年ということのためにはそんなことを考えていかなければ……。

緒方　法人としても、大学としても、とくに大学は募金担当の人もおり、寄付を求めているわけです。けれども百周年というのがきっかけになりました。日常的に同志社大学、女子大学はこんな教育をしているんだということが、出てこないと横山先生がおっしゃったようなことはむづかしいと思いますね。

新島先生が同志社をお始めになるのに募金をされたときに、刑務所からも一銭とか二銭とか寄付があつていたのです。新島先生の壮図といえますか、熱意といったものが刑務所の中にいる人たちの心もとらえたのだと思います。そこまではいかなくても、多くの人が、これは同志社大学の特徴だと普遍的にその価値を認めるような教育が確立されたときでなければ、むづかしいだろうと思います

ね。

横山 俗に言えば、りっぱなチャペルを建てたい、その建設費を募金するそのかわり寄付していただいた方は、礎石に名前を刻みますとかね。あまりそれはひどいかもしれませんが、時間もなくなりました。ご多用中のところありますがどうございました。

緒方 キリスト教主義教育委員会にときどきお入りください(笑)。そういう物の考え方を私たちはあまりしないものですから。話したいへん具体的などころまでいきましたが、時間がなくなりました。ご多用中のところありますがどうございました。

私が知っているところでは、今後十五年の進学人口の増減、国庫補助が従来のような率で年々増額して支給されるという見通しが暗くなりました。政局の変動でどう変わるかわかりませんが、おそらく大筋としては、そう国庫助成が増額されることはむづかしくなっています。助成方針としても、経常費補助というようなタイプから、かなりプロジェクト中心の補助へと傾斜しているようなことを感じます。一方におきましては、先ほどご紹介しました中間計画などで、むしろ私たちがあとを追いかけて検討していかざるをえないと

いう状況のなかに私たちあると思います。

今後は非常にむづかしいと思いますが、しかしこれを最初の座談会として、次にまた「時報」があまり時間を置かないで、こうしたテーマについて計画を練っていただければありがたいと思いますので、きょうはこれだけに終わりたいと思います。なんのまとめもしませんが恐縮でございますけれど、まとめなくて次へ移すという形でご了承願いたいと思います。

ありがとうございました。

(一九八三年十二月二〇日収録、於同志社大学神学館会議室)

同志社談叢 第四号

目次

論文

アーモスト館五十年の歩み……北垣宗治
新島襄の恩人セイヴオリー船長

……オーテス・ケリー

同志社の近代建築(下)……前 久夫

―遺構と資料―……山形政昭

資料

常議員会録事

―自・明治三三年四月三日

―至・明治三〇年九月七日―

組合教会臨時総会記事

―明治二一年一月二三日～二八日―

新島襄に関する文献ノート(その三)

―著者・筆者別―……河野仁昭

同志社社史資料室編集・発行

三月二〇日発行 頒価一、〇〇〇円

取扱い・同志社収益事業課

電話(〇七五二五一一三〇三七)八